

(32)

氏名 (生年月日)	岸 澄 子 ケン スミ コ
本 籍	
学位の種類	医学博士
学位授与番号	乙第 143号
学位授与の日付	昭和48年 2月16日
学位授与の要件	学位規則第 5条第 2項該当 (博士の学位論文提出者)
学位論文題目	メニエール病の経過と予後に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 岩本彦之麿 (副査) 教授 三神 美和, 教授 石井 妙子

### 論 文 内 容 の 要 旨

#### (目的)

メニエール病の臨床症状は多種多様で、かつその経過も長短まちまちである。そこでメニエール病の臨床的経過を明らかにすると共に、その臨床症状ならびに検査成績から予後に関係する因子を知る目的から研究を行なった。

#### (対象)

昭和42年 1月から45年12月までの 4年間に当科を受診したメニエール病78例、および原因不明の耳性眩暈98例の内、外来観察ないしはアンケートによつて受診後少なくとも 1年以上の経過を知ることのできたメニエール病67例、耳性眩暈78例をえらんだ。

#### (結果)

アンケートの結果、めまいが治癒あるいはほぼ治癒した例は約90%以上あつたが、その罹病期間はメニエール病では平均 4年 4カ月であつた。

初発年齢はメニエール病、耳性眩暈ともに20代から40代に多く、初発年齢が高令化するにつれて罹病期間が短くなる傾向がみられた。

初回眩暈発作時に耳鳴、難聴を加えて 3主徴をもつたものは42例 (63%)、さらに耳閉塞感を加えて 4主徴を伴つたものは24例 (36%)であつた。

まためまい発作が cluster grouping を示す傾向は耳性眩暈例には少なく、メニエール病に特徴的であつた。

CMI (Cornell Medical Index) 検査では、メニエール病が精神身体疾患の傾向をもつことが確かめられた。

初診時の純音聴力検査では、平均聴力損失が40dB 以内の軽度難聴者と40dB 以上の難聴者の 2つのグループに分けることができた。患側耳の聴力型は水平型が最も多く、次いで斜昇型、高音急墜および斜降型、山型、正常、聾の順であつた。

このうち、水平型は発病よりの期間が長い例に多く認められ、一方斜昇型はその逆に経過の短い例に多かつた。

温度刺激検査と発病から初診までの期間との関係は No Response 群が他群に比し、明らかに長い経過を示した。

臨床症状のうち予後に関係すると思われた因子は、初発年齢、めまい発作における cluster grouping の有無であり、若年者に初発した場合、発作に cluster grouping をみとめる場合、初回発作時にすでに難聴を自覚した場合に治癒までの期間が長くなる傾向があつた。

検査成績と予後との関係をみると、純音聴力検査で平均聴力損失が40dB 以上か、あるいは患側耳の聴力型が高音急墜あるいは斜降型の場合に短い予後期間を示した。

温度刺激検査成績では正常型か、あるいは著しい半規管機能の低下例に予後期間の短い例を多くみとめた。

### 論 文 審 査 の 要 旨

本論文はメニエール病の経過 および 予後を、その発症年齢、発作の発現様式、CMI 検査、純音聴力検査

査，ならびに温度刺激検査の成績等から判定できることを明らかにしたもので，医学上価値ある論文と認む。

**主論文公表誌**

メニエール病の経過と予後に関する研究.

日本耳鼻咽喉科学会雑誌 第76巻 3号 386  
～ 400頁 (昭48. 3. 20日発行)

**副論文公表誌**

1) 特発性鼻中隔膿瘍の1例.

耳鼻咽喉科 40巻 8号 613～ 617頁

(昭和43年8月)

2) 喉頭の前癌状態について.

東京女子医科大学雑誌 41巻 9号 703～ 7  
11頁 (昭和46年9月)

3) 咽頭横紋筋肉腫の1例.

耳鼻と臨床 17巻 3号 175～ 178頁 (昭和  
46年9月)